Ⅱ　附中から附高への6か年の学習成績変化の追跡（その4）

——41年度入学者の成績変動の分析と3か年度分のまとめ——

戸　苅　　進

はじめに

中等教育の6か年は，単に初等教育から大学教育への，または成人教育への橋渡しの段階としての重要性に留まらず，生涯教育のコアとしての重大な意義をもつ時期である。

この時期に在る生徒の一人一人に，それぞれ，力一杯に充実した生活を送らせるための指導の基礎資料の作成の工夫と，それに基づく，各段階における生徒の早期の軌道修正的な指導の実証的研究は，本校のように，中学と高校併設の国立附属学校あたりで，まず手を染めなくてはと，その道の決して坦々としたものではないことを重々覚悟の上，われわれのグループで取り組み始めたのは昭和44年度のことであった。

このようなねらいでの，学者としての第3者的立場からの，全教科を総合した成績の変動についての研究は，既に，1964年に，元本校の校長でもあった大西教授の御研究があるが，現場にあるわれわれの第2人称的立場（生徒から見れば）での実証的研究を，各教科の特性との関連において堀り下げてみたいものと考え，いろいろな資料整理の方法を定性的に模索したのが，第1年の仕事であった。

昭和45年度には，変動の特に大きく見られる数学と英語についての，大西先生の方法による，資料の作成を試み，それらを用いて，指導上の仮説のみつけやすいような，いろいろの処理方法の研究を行なった。

次いで昭和46年度には処理方法として有効なものの目途もついたので，昭和39年度，および40年度に，中学に入学した生徒のそれぞれ6か年にわたる，国・社・数・理・英の5教科と，全教科総合の成績変動の資料の整理を完了した。

本年度は，幸いにして文部省からの科学研究費補助金の交付も受けることができ昭和41年度に中学に入学した生徒の，上記方法による資料の整理を先づ完了した。さらに過去3か年度分の資料を一括して，中学の各学年における，国・社・数・理・英の5教科と，全科総合の成績のそれぞれについの，現段階の成績と高校での成績の関連図表の，実際の指導場面において活用しやすい形のものを工夫し，それを生かして，実際に，中学3年の生徒の指導を行なってきている。この実際の指導の方は現在進行中であり，その結果らしいものが，一応中間報告的にでもまとめられるのは，明年の今頃でなくては無理の状態であるので，詳細については，一切紀要の次の集にゆずりたいと思う。

1.　41年度入学者の成績変動の分析

前年度分までの資料整理方法と全く同じ要領で（詳細は第2報を参照されたい），中1から高3まで，各学年の第1学期と第2学期の評定の代数和を直接の資料とし，各学年の平均得点を中心として，±0.5 S．D．の範囲内に在る者を3の段階とし，それよりプラスとマイナスの方向にさらに1.0 S．D．の範囲内に在る者を，それぞれ4と2に，さらにそれを越えたものを，それぞれ，5と1とする，5段階評価に換算したものを，当該学年の個々の生徒の成績段階とした。

これらのデータに基づいて，昭和41年度中学入学者について，6か年間の全科・国語・社会・数学・理科・英語に関する中学段階での成績変動と，高校での成績変動型とを男女別に整理した関連図表が次頁の各図である。

各図表について真中の3桁の数字の組みは，中学3年間の成績変動を，また左側の数字の組みは，そのような生徒が，高校ではどのような変動型をとるようになったかを男子について，また右側の数字の組みは女子について示したものである。各数字の組みについては，左から右へ順に1年から3年の成績段階を示しており，また線1本が生徒1人に対応している。なお，線のうち実線は中学よりも高校において上昇の傾向を示した生徒を，反対に，下降の傾向を示した生徒については破線を用いて，大勢の比較の便をはかった。

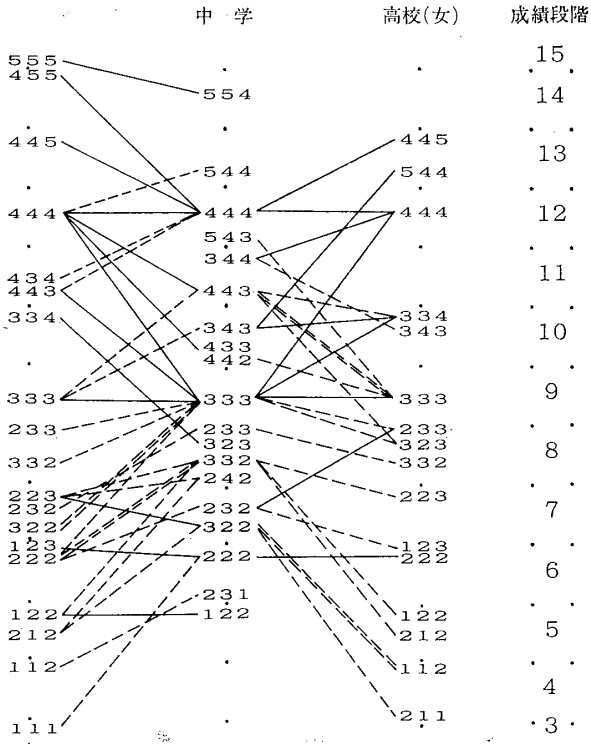
また，成績変動型を示す数列の数字の和を成績段階として大枠の比較が，しやすいように示しておいた。

それから，同じ成績段階内での数列の配置は，高学年になるほど成績が上昇している型のものを，より上位に置くようにした。

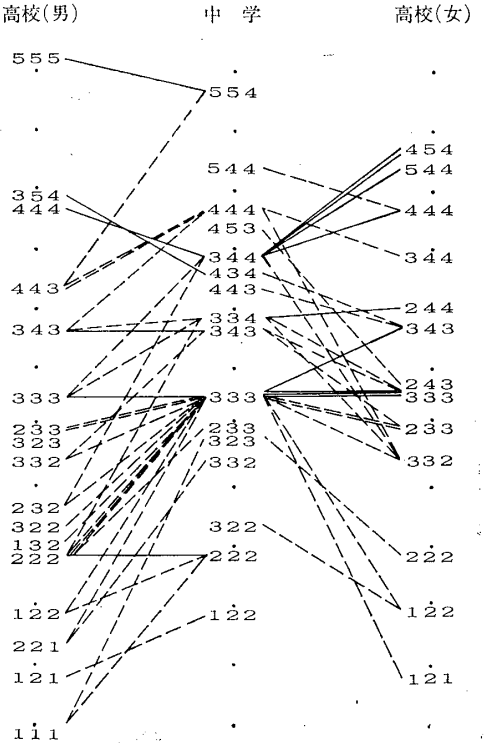
これらを，39，40年度入学者のものと比較すると，細部の微妙な違いは当然のことながら，大勢の型は，各教科それぞれに驚ろくほどの同一性を示しているこ

41年度入学者成績の変動

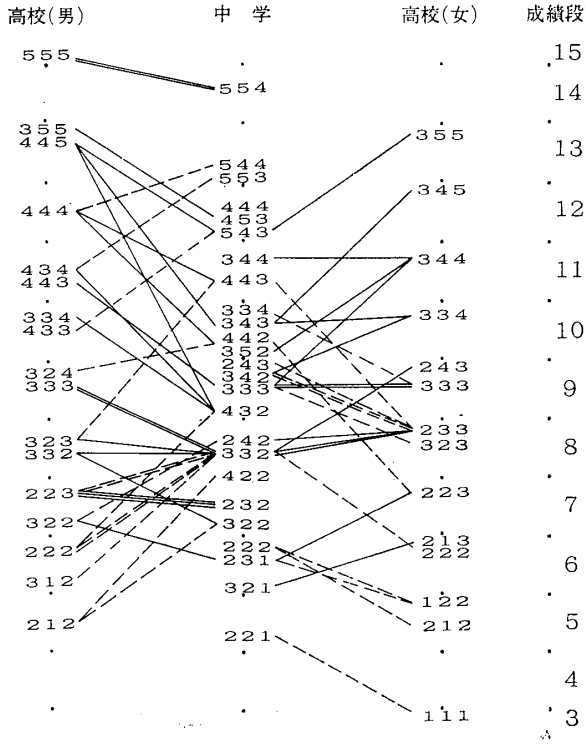
（全　科）



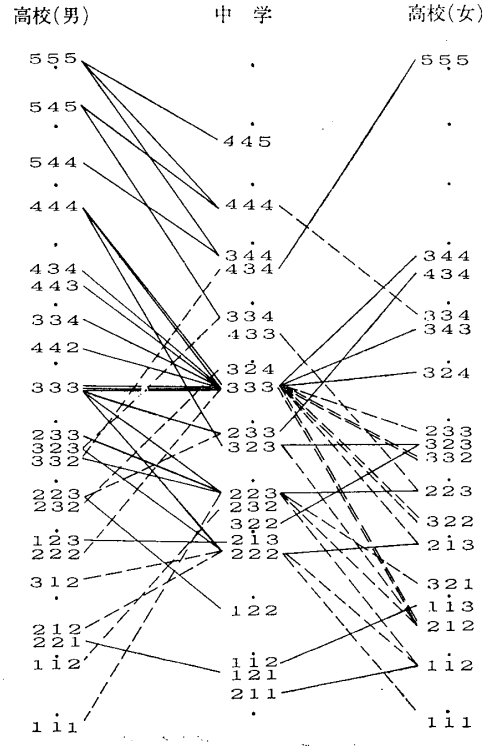
（国　語）

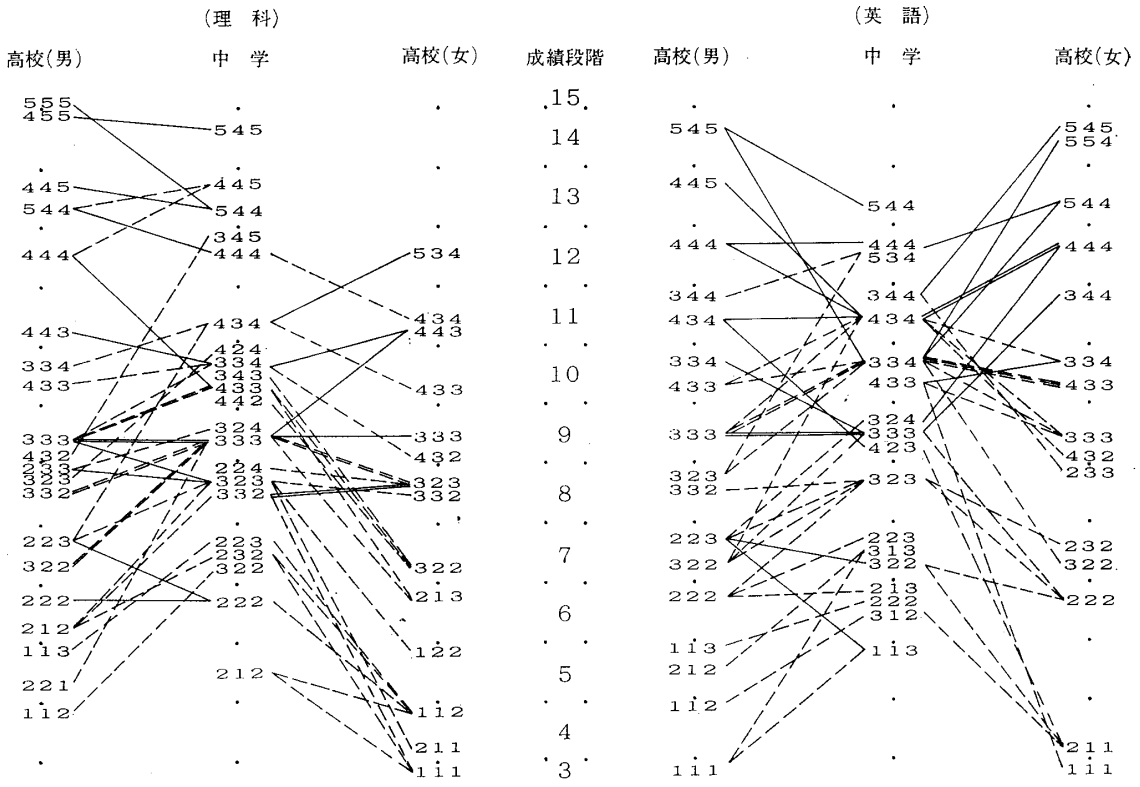


（社　会）



（数　学）





とは注目に価いすると思う。

2.　中学での指導用の関連図表の工夫

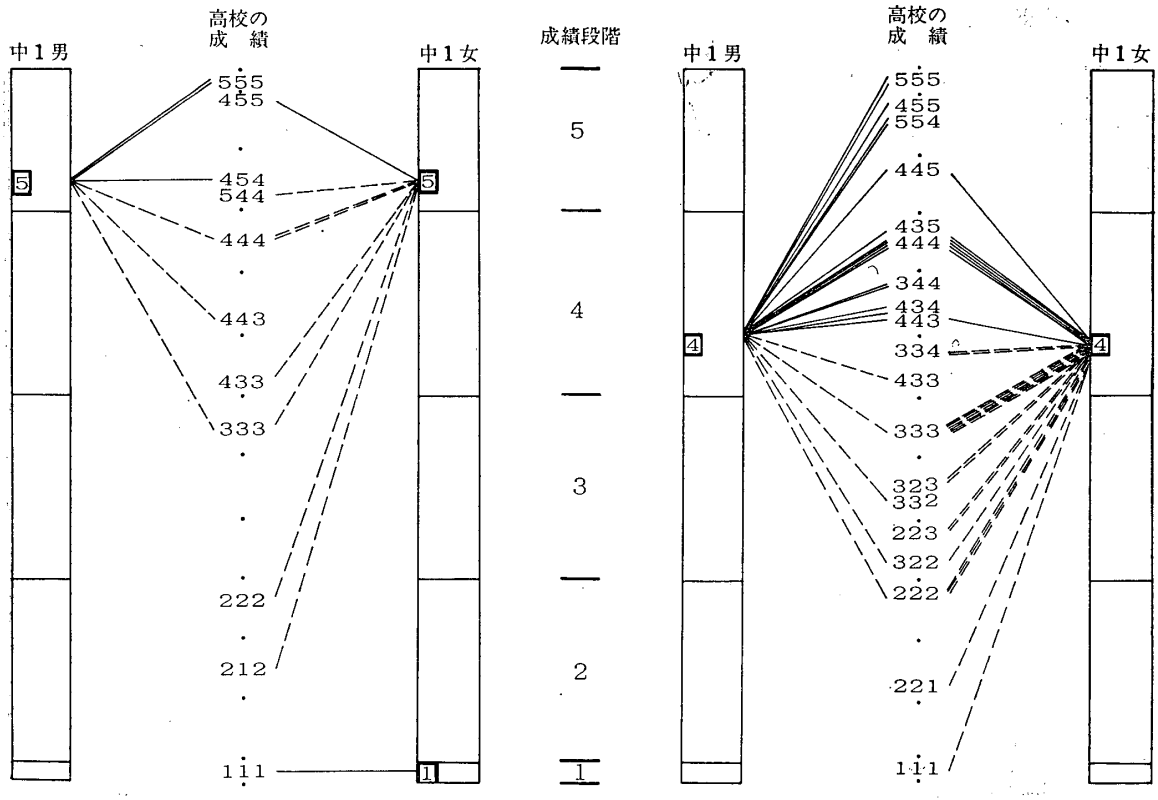
まえがきの中にも既に略述したように，以上のような分析的な資料の作成の積み上げを行なってきている本来の目的は，中学のどの学年あたりで，総合成績について，あるいは各学科の成績について，高校での成績段階が，どのあたりに限定されてゆくかを，かなりな標本数の集積の上に，ある程度の可能性の限界，ないしは，危険性の予見ができないものかとの発想に，あったのである。

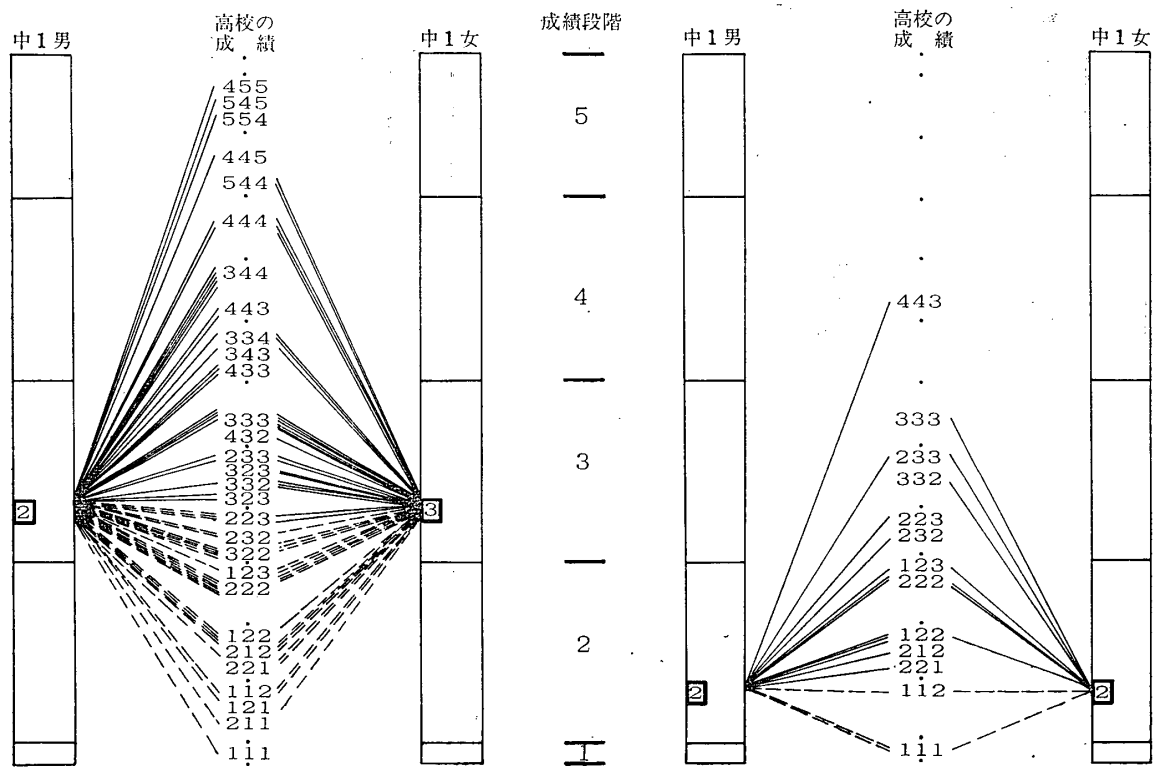
この点に関し，第2報および第3報に発表したような成績変動表の改良の方向をいろいろ試みてみたが，同僚や，保護者に見てもらった感想でも，何となく使いにくく，また全体の感じも，とらえにくいとの意見や忠告が大変多かった。そこで思い切って，表よりも見易いとの感想の多い，上記の図表方式に切りかえることにして，次のようなものを作成してみた。

実際に使用する目的では，全科の総合のもののみではなく，各教科別，のものも作成したわけであるが，未だいろいろ改善すべき点も残されていることが感じられるし，それらを活用して，この一年間指導してきている中学3年の生徒が，卒業するまでには，まだ，3か月もある現在，これら資料のうち特に目ぼしいものについての紹介をするにしても，実際の指導経験と密着した状態での記述の方が，理解して頂くにも便であると考え，今回は，その概要を推察して頂く資料として全科総合成績についての，中1，中2，中3の各段績における，各成績段階と，高校での成績段階との関連図表を発表しておくに留めたいと思う。

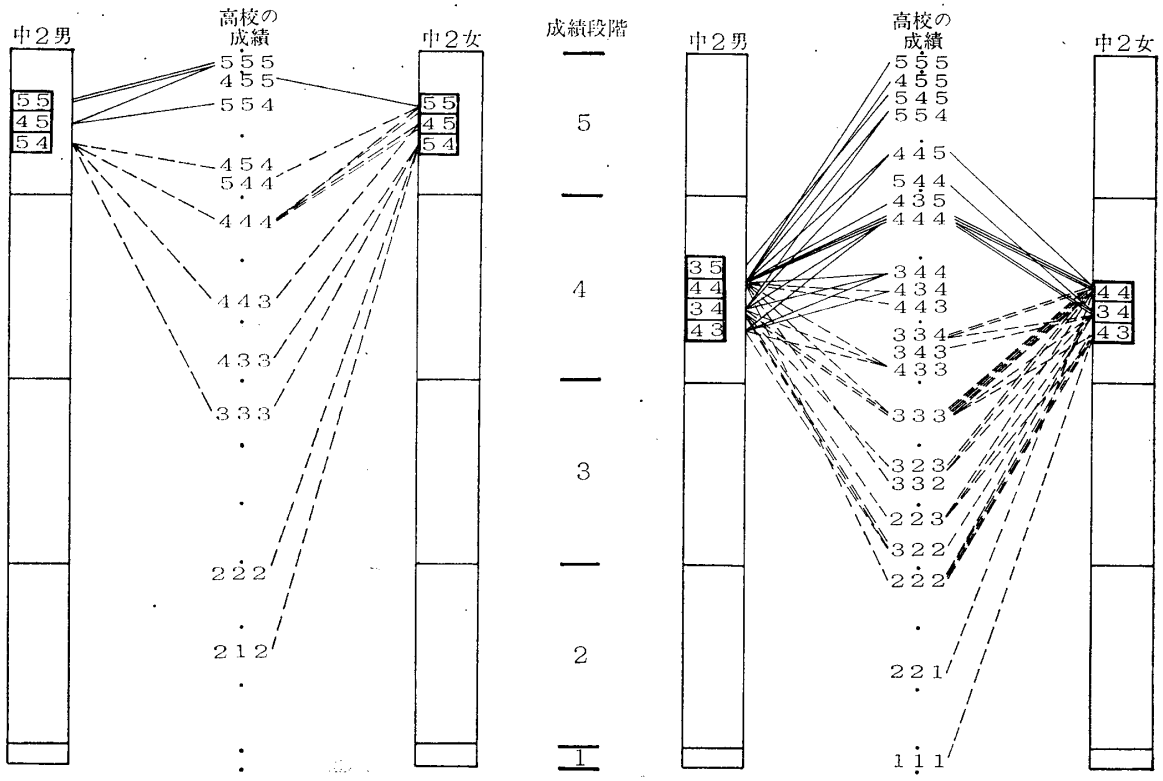
各図表について，真中の3桁の数列は，高校での成績段階を，左から右に高1から高3の順で示したものであり，それぞれの左側および右側の枠の中の数字は中学のそれぞれの学年当時までの，男子および女子別の成績変動の型を，5段階にして，示したものである。資料はいうまでもないことながら，昭和39，40，41年度に，それぞれ附中に入学した生徒で，附高にまで進学，卒業した総計181名（男95，女86）についてのものである。

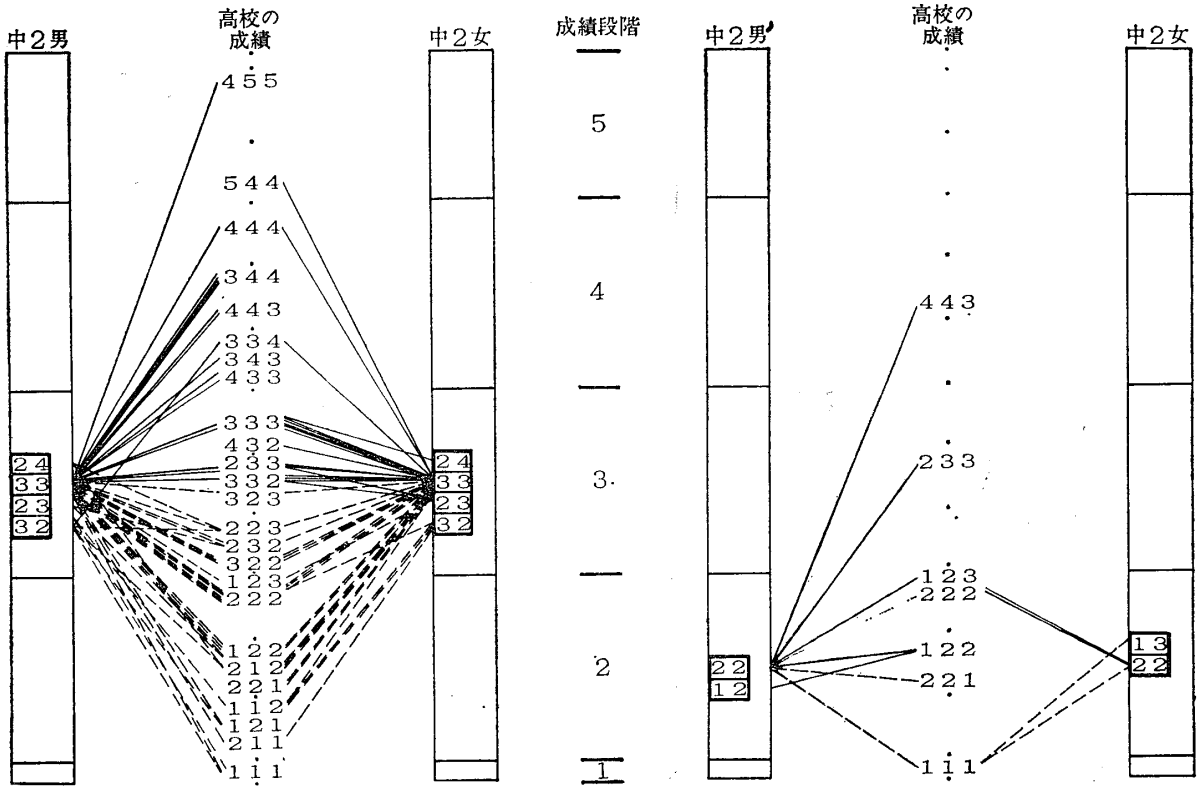
なお，成績段階区分は，高校については，3桁の数列の和が3のものを1，それ以上6までを2，9までを3，12までを4，15までを5とした。一方，中学の成績については，その後の現状維持の困難さをも盛りこむ意味で，中1では5，4などの評定段階を，各成績段階の下から⅓の位置に配置，中2では，これまでの成績が45のものを，成績段階4の下から⅔の位置のトップに置き，以下44，34，43の順に並べるというようにした。

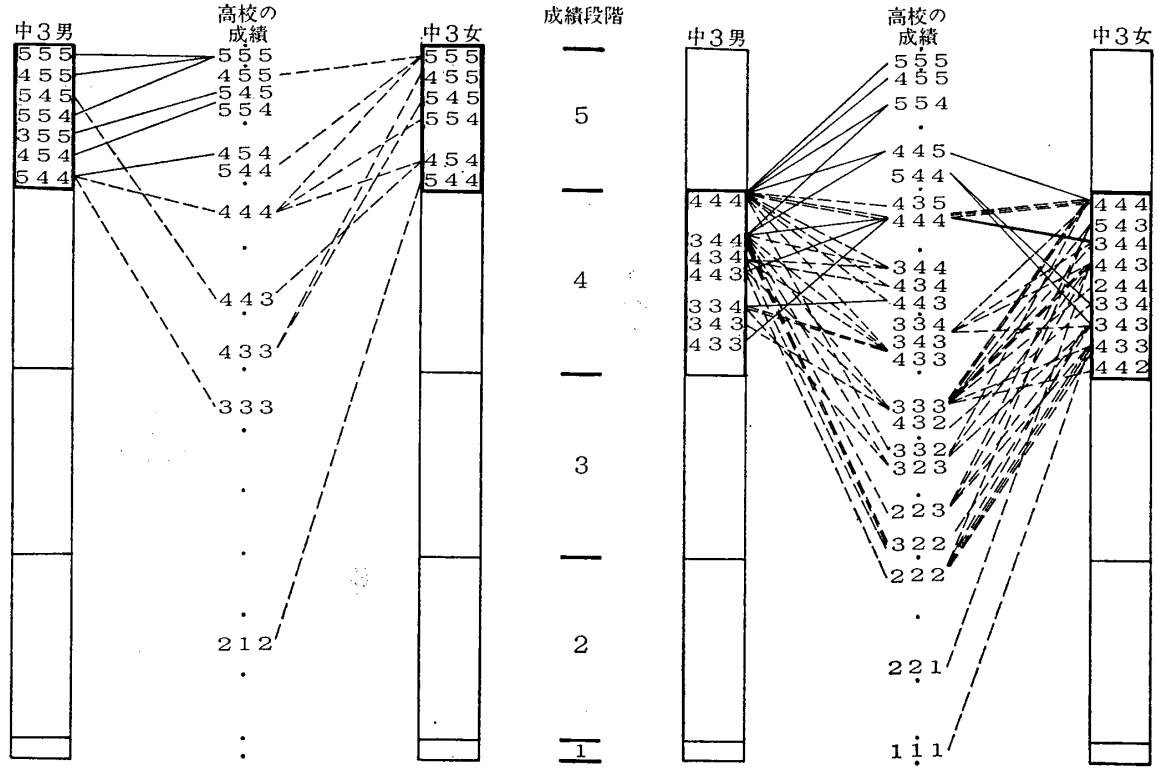

中1男
高校の成績
中1女
成績段階
555
455
454
544
444
443
433
333
222
212
111
5
4
3
2
1

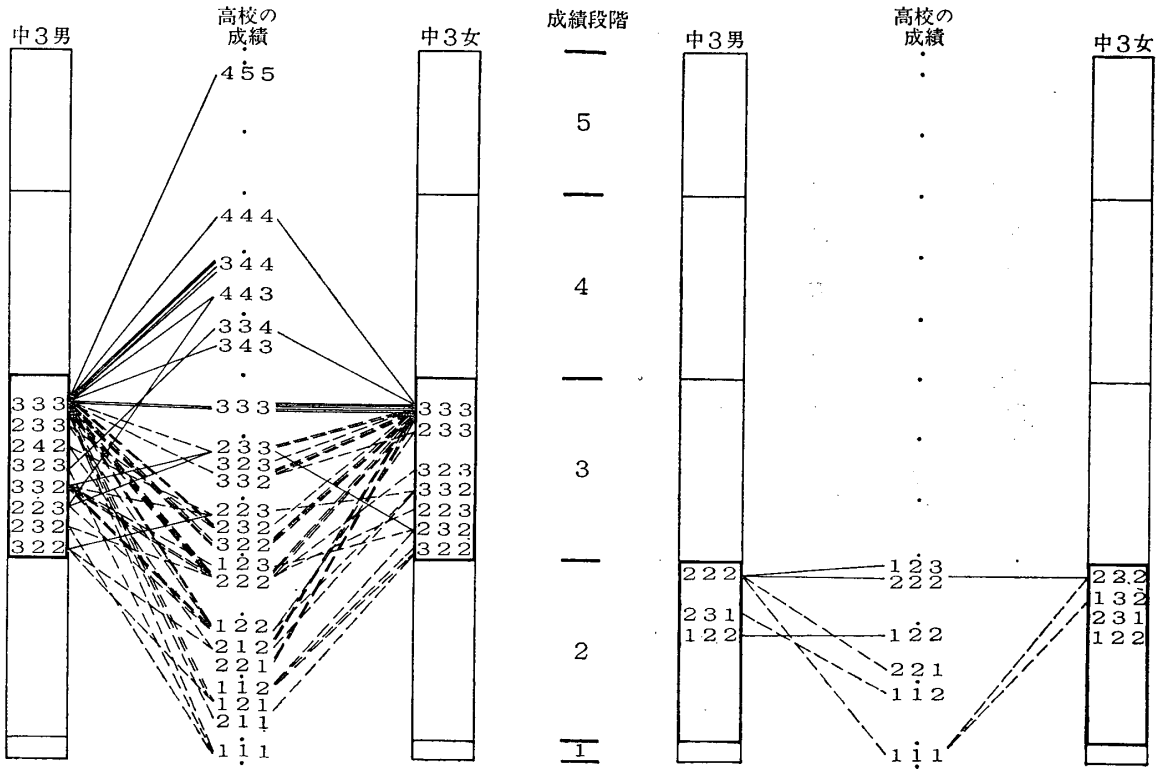

中1男
高校の成績
中1女
成績段階
455
545
554
445
544
444
344
443
334
343
433
333
432
233
332
322
223
232
123
222
122
212
221
112
121
211
111
443
333
233
332
223
232
123
222
122
212
221
112
111
5
4
3
2
1

附中から附高への6か年の学習成績変化の追跡（その4）






中3男
高校の成績
中3女
成績段階
5
4
3
2
1


中3男
高校の成績
中3女
成績段階
5
4
3
2
1

これらの図表を比較してみると，いろいろ興味ある，というよりは，時として，恐ろしくさえ感じられるような，いろいろの傾向が，読みとられる。たとえば，

(1) 中学での各成績段階の者が，高校で示す成績変動の巾は，事例の少い2段階（1段階は勿論）を除き，ほとんど一定している。換言すれば，中1段階でほとんど決る。

(2) 上記の巾は，極めて少数の例外を除き，男子の方が女子よりも上限は必ず高く，下限もほとんど常に女子よりも高い。言いかえれば男子の方が伸びがよいといえる。

(3) さらに，これも極めて少数の例外を除き，各学年の各成績段階において，中学より高校での成績が上昇の傾向を示す者の比率は，常に男子の方が女子よりも優位に立っている。

参考までに，以上の傾向の概略を見やすいようにまとめたものが，次の表である。

成績段階	中1		中2		中3	
	男	女	男	女	男	女
	上昇 下降	上昇 下降	上昇 下降	上昇 下降	上昇 下降	上昇 下降
5	3 3	1 7	4 4	1 10	6 3	0 9
4	16 5	7 18	17 15	7 24	10 26	5 32
3	27 26	22 21	17 30	17 23	15 29	8 29
2	12 3	7 2	6 2	2 2	3 3	1 2
1		1				
計	58 37	38 48	44 51	27 59	34 61	14 72

さらに，もう少し細部にわたって，比較検討してみると，次のようなことにも注意をひかれる。

(4) 中1段階での成績，4，3は，高校では，ほとんど全段階にひろがる可能性ないしは危険性をもっている。

一方，5は，事例が少いので余り断定的なことは言えないが，大体高校で中以上におさまる確率が高く，反対に2は中以下にほとんど確定的に，運命づけられるようである。

(5) 中2段階での成績が，5である者よりも，4である者の方が，高校で上位の成績に向上してゆく確率が高い。

(6) 中3で5の成績の女子が，高校でもその状態を保つことは，極めて困難のようである。逆に転落の危険率は決して少くなく，極端な例では，高校での成績が2の段階にまで下向した先例もないわけではない。このことは，成績4の女子について一段と顕著に見られる。

(7) 中3で3の成績の場合は，男女共に，その⅔くらいは成績が下向するものと覚悟しなくてはならない。

(8) 中3でも依然として2の成績の場合は，最もうまくいっても同程度，多くはそれより下向の傾向をとるものと考えた方がよい。

おわりに

以上が本年度の，原稿締切りまでにまとめ上げたものの主なものであるが，本年度の研究としてもなお，進行中のものもあり，それらの反省，検討の上に，来年度は，さらに，早期の軌道修正的な指導の実証的研究に焦点をしぼって，研究の堀り下げを行ってゆきたいと考えている。なお，本研究については，本年度は，特に中3の指導を中心に本校の児嶋・富田両教官の，非常な協力を得ていること，および，名大教育学部教育心理学教室の大橋正夫助教授に，いろいろ御指導頂いていることを申し添えておきたいと思う。

文献

戸苅　進　附中から附高への6ケ年の学習成績変化の追跡（その2，3）名大教育学部附中高紀要第16，17集。

大西誠一郎　附属中高校6年間の学業成績の推移。名大教育学部紀要（教育心理学科）1964，